論　　説

新しい大学像を求めて

——学生諸君への手紙——

長　　清　　子

「アカデミック・プログラムの方針——学生諸君への第2次報告——」と題して1968年11月15日に国際基督教大学において発表されたこの文章は，教養学部長として，筆者が「新しい大学像」を求めての大学革新の方向を探るディスカッションを大学のふところからさそい出すための一つの発題的問題提起として執筆し，当大学構成員の間に配布したものである。

まえがき
ICU の教育目標とその達成のための課題
I　ICU の学問的使命達成の課題
A　教養学部における専門教育と一般教育
——クラスター型大学の可能性——
B　カリキュラムのあり方（講義形式とセミナー形式）
C　アカデミック・プログラムへの学生参加
D　各学科の今後の強調点と課題
社会科学科—人文科学科—自然科学（理学）科—語学科—教育学科
II　ICU の国際的使命達成の課題
A　アジア諸地域の大学との交流
B　アメリカとの関係の革新
C　その他の地域との交流の問題
D　国際研究センター設置の可能性
III　ICU のキリスト教的使命達成の課題
むすび

プロテスタントの原理は，パウル・テイリッヒもいうように，歴史の中に実現するいかなる文化形態をも，宗教形態をも絶対化することなく，そ

れらをこえて立ち，しかも，あらゆる文化の中にあらわれ，そこに生きて働き，とどまるところを知らない力だと云っていいでしょう。プロテスタントであるとは，自らの生み出したものであっても，歴史の現実を常に鋭く批判し，自らの現実にプロテストする革新力であることだと信じます。プロテスタントによって創設された国際基督教大学（以下 ICU と略称）は，常に自らの現実へのプロテストを忘れず，生々と革新への姿勢をもって根本的自己変革を追求する時にのみ，真に ICU 的であるといっていいのではないかと思います。

ICU の革新を求めて歩みはじめた直後の昨年11月に「アカデミック・プログラムの方針」についての中間報告的手紙を学生諸君に書いてより1年近くなりました。その間，教養学部長のお茶の会や学科長会議（学科課程委員会を兼ねる）を公開でひらき，アカデミック・プログラムの具体案の教授会における進展状況や困難点を含む諸問題などを説明すると共に学生諸君との意見交換の時を持つよう努めて来ました。また，その間，個人として，あるいは，グループとして学生諸君がいろいろの希望や意見をよせて下さったことを感謝しています。

昨年書きました方針は大体皆さんの御支持をいただいたようでしたが，その具体的方針のうち，あるものは，ある方々には公約的性格を持つものとして受けとられた面もあり，たとえば，2学期制が速かに実現しないことは公約違反だといった感想もなきにしもあらずだともれききます。教養学部大学としての ICU は5つの学科を内包していますだけに，夫々の学問分野の特質に由来する多元的要求を持っており，アカデミック・プログラムの立て方や具体化について一つの決断をしようとする時，相矛盾する要因が顕在化して出て来ることがしばしばありまして，一つの学科に好都合なことが他のある学科には非常な支障をもち来たらすこともあります。

2学期制実現の困難もこうした問題の一例でして，その解決のためには，多角的な配慮と相互の協力のもとに一そう慎重な努力が必要だと思います。（1969年度は実験的に改革した学期制を試みることになっています。）

しかしながら，私共の大学の現実はそう悲観的な障害にとりかこまれてばかりいるわけではありません。教授会メンバーの熱意と忍耐強い協力のもとに大学の革新への考え方，方針等がだんだんに明らかになり具体化しつつあります。

私共は ICU の新しい在り方を，少数者の計画によるものとしてではなく，出来るだけ巾広い大学構成員の責任ある参加を求めつつその考え方，討議，計画のプロセスを通して，時間をかけて新しい ICU 像，その体質と構造とをこの大学共同体のふところから内発的に明確化してゆき度いと希っています。こうしたアプローチで大学革新を追求する途上にあって私共の現在考えていること，計画しつつあることを，第2次報告としてお伝えし，学生諸君の卒直な意見をよせていただき度いと思います。

ICU の教育目標とその達成のための課題

さきに書きました報告の中に，私は，「ICUの求める人間」，即ち，ICUがどのような人間を育成しようとしているかについて，私の理解するところとして，「学問する人間」，「自由な人間」，「社会的人間」，「世界的人間」の諸要素の総合された人間の形成に ICU の教育の課題があるといってよいのではないかということを記しました。それは，要約しますと，真理の探求において，神以外の何ものをも神（絶対的価値）とせず，その故にどのような理論をも，考え方をも自由に，かつ，冷静に研究対象とすることのできる主体的自由を堅持し，学問的探求，発見，検証を通して人類への貢献を志向する学問精神の高揚にコミットすると共に，他の学問分野，あるいは，他の文化，その価値体系に対しても開かれた自由な意識をもち，総合的判断力と創造的な思考力とをもつ人間，そして更に，現実社会の矛盾の内包する問題を学生と教授とが共にきびしく受けとめ，その問題を分析し，究明しようとする生々とした問題意識を堅持し，そうした学問共同体としての活動を通して，人間の尊厳，社会正義実現のために，現実社会と，世界の諸関係を革新してゆく原理を生み出してゆけるような人間，新

しい社会と世界形成のためのヴィジョンをもち，確かなパースペクティブをもって開拓的に，かつ，忍耐強く働きつづけることの出来る人間の形成を目ざすということでした。

こうした教育目標を達成してゆく上に具体的に問題となること，更に，おし進めて共に考えてゆかねばならないと思うことを，2, 3の点にしぼって記したいと思います。

I. ICU の学問的使命達成の課題

ICU はその教育目標の達成に教養学部の制度をとり，夫々の専門分野における学問的探求と共に，自己の専門分野をこえて，広く学問，知識の交流をなし，総合的思考力と創造力とをそなえた，大学人の育成に努めて来ましたが，現在，再検討を要する幾つかの問題に直面しています。

(ICU は，教養学部大学として存続すべきなのか，あるいは，ICU は初期の使命は一応果したと考え，今日，および，未来にむかって独自の使命を達成するためには，多くの矛盾や困難な問題を内包させている教養学部は思い切って解体し，全く新しい大学——たとえば，学部は大担に縮少し，学科構成も改め，他方，世界各国からすぐれた学者を集めて，高度の学問的研究を開拓的に行う高等科学研究所のような研究所を充実すると共に，それを基礎として，大学院大学を拡充してゆくといった考えなどもその一つとしてありうる——につくりかえるべきなのか，こうした問題については，ICU 構成員の間にも，また，関係者の間にも，いろいろ意見があると思います。以下は，教養学部大学として存続する場合を前提し，その制約のもとでの改革の可能性をさぐろうとしたものです。)

A 教養学部における専門教育と一般教育

第一には，Liberal Education を目ざす教養学部大学における専門教育と一般教育 (General Education)，その多元性と総合性がダイナミックな緊張関係をもって生きているかという問題があります。

開学以来 ICU が最も力を入れてきたことの一つである一般教育はその独自な成果にもかかわらず多くの不満の原因にもなっていると共に，学問的専門分野の目ざましい進歩，方法論の検討，知識の爆発的増大に伴う専門教育の質的高度化が強く要求される現状にあります。たとえば，自然科学科（1969年4月より理学科と改称）においては，発足当時と異って，他の諸大学の理科系学部において自然科学の基礎科目と考えられるものがかなり変って来ているために ICU の自然科学科卒業生が特別の受験用セミナー等による準備なしに日本の他大学の大学院にストレイトに入学することは困難だとの訴えをききます。それは今後 ICU の教養学部の枠内において自然科学科が今日の学界の水準を保ちつつ独自な自然科学科としての発展を期待出来るかという切実な問題でもあります。じっくりと腰を落着けて学問する姿勢を養い，原理的思考の出来る人間を育成しようとのねがいより，他のある学科では必至と考えられる2学期制案が自然科学科においては強硬な反対に逢着する要因の根底にはこうした現実があるわけです。しかも，こうした専門の分化，研究と教育の質の高度化は，他方，分化した知識を総合し，意味づけ，人間的，人類的目的意識へと関連づけてゆく方向づけがますます必要になって来ています。従って，専門教育と Liberal Education，多元性と総合性のダイナミックスの課題は質的にも，スケールにおいても，新しい展開において追求されてゆかねばならないと思います。このような課題をどう受けとめて現実的に解決つけてゆくかは，大学の将来の形態，構造にかかわる大きな問題で結論はまだ出ていませんが，可能性の一つとして考え得ますことは，一方，クラスター型（ぶどうの房型）の構造様式を教養学部の内部構造に実験的に試み，教養学部内の5つの学科〔註〕のうち，必要と認められる学科には現在の教養学部のワクを多少こえるように見えても，その学問分野の要請に応えうる発展を研究・教育の両体勢に許容し（こうした方向への充実は特定の学科の上に大学院を創立してゆく場合に必要な条件になることも考えられます。），他方，それらをより広く抱擁し，総合しうる一般教育科目の充実は，ICU 本来の教育目

的達成にとって必至の重要性をもつものですが（こうした要請に応えうる一般教育は，現在のように低学年において，時としては浅く，広くの印象を与え，学生の不満の原因となり勝ちな内容で行うよりは，むしろ，高学年になってからの方が有効，かつ，有意義ではないかという考えもあります），一般教育の積極的意味づけを含む改革案は，現在，一般教育委員会で検討中です。改革案が少し明確化して来た段階において，追って学生諸君に御報告する予定です。その再検討の中には，更に inter-departmental な，あるいは，inter-divisional な科目を inter-disciplinary な総合的学習計画として活発化してゆくことなども含まれると思います。また，1年生のためにフレッシュマン・セミナーをという希望は多く表明されていますので，一般教育科目の一部をセミナー形式で取扱うことにし，夫々の学科において，特定の学問分野の代表的著書を指導教授と共に読むというようなことも一つの可能性として考えられていますが，まだ決定にはたちいたっていません。

こうした方向への強調は，例えば理学科自体の中におきましても，有機的連帯性を強調し，境界領域を広げつつある近代科学の戦列に適応しうる学生を養うことによって他大学に見られない integrity の発揮を目ざそうとしています。

尚，ICUにおけるクラスター型（ぶどうの房型）の可能性は上のような内的発展の構造の可能性として考えられると共に，他方，東京神学大学，ルーテル神学校，その他，将来 ICU の周辺に創設されるかもしれない諸教育機関，あるいは，近隣のキリスト教主義大学等と教科における協力，あるいは食堂，図書館，研究施設等大学の諸施設の共有・協力等，外的連関における構造としても考えうると思います。

〔註〕 **クラスター型大学**

クラスター型（cluster type）の大学とは，幾つかの小さな大学（カレヂ）が夫々の自律性，教育理念やアカデミック・プログラムの独自性などを堅持しながらも，図書館，保健・体育施設，講堂，食堂，コンピューター・センター等を共

有し，講演，カンファレンスなどを共催し，または，講義，その他，ある種の教育活動が互の大学の学生に対して開かれているといったつながり方で「ぶどうの房」のように群をなして共存するタイプの大学のことである。最も古くはオックスフォード大学，あるいは，ケンブリッヂ大学があるが，今日世界各国においてクラスター型の大学の数が増加しつつある。1967年にオックスフォード大学で開催された「クラスター・カレヂに関する会議」(The Conference on the Cluster College Concept) の報告書，その他も示すように，アメリカのクレアモント・カレヂ (Claremont Calleges) がクラスター型大学の一つの典型と考えられており，パシフィック大学 (The University of the Pacific) は“クラスター・カレヂ”の名称を最初につかつた大学であり，カリフオルニア大学のサンタ・クルズ・キャンパス (The Santa Cruz Campus) はクラスター・カレヂとして最初から計画して設立された最初の州立大学である。その他，アマスト大学，マサチュセッツ大学，スミス大学，マウントホリオーク大学等を含むカネティカット河周辺の群構想，その他，他大学との協力関係をもつ大学が千を越え，そのうち，クラスター型のグルーピングをとる大学は50校ほどになり，その数はますます増大しつつある実情にある。今日の大学が，個々の孤立した小さな大学（多くの場合，リベラル・アート・カレヂ）か，あるいは，巨大なマンモス大学かのいずれかへむかうよりは，むしろ，クラスター型大学への方向を志向する要因は，私が，1966年，あるいは，1968年に，クレアモント大学をはじめ，クラスター型大学を訪問してしらべた経験や諸々の資料などによるいろいろの大学の場合を総合して考えてみると，次のような諸点になるのではないかと思う。

(1)　第1に，大学を小さなサイズにとどめ，学生，教授の人格的接触の意義が充分に保持できる条件，および，一つのアカデミック・コミュニティとしての自律性（オートノミー）を確保しながら，他方，近代文化の特質，必然的要請としての多様性や流動性を内包することが出来るということ。即ち，小さなサイズのアカデミック・コミュニティとしての親密さと大きなサイズの，多様性を含む学問共同体とを同時的に確保することが出来るということである。一つのユニットの中のある学問分野の強さが他のユニットにおける弱さを補い，一つのユニットにおける特質が他のユニットにおける別の特質と相補いあう。更に，一つの大学の小さな教授グループの閉ざされ勝ちな交りが，異った雰囲気なり学風なりを持つ他の教授グループとの接触を通して学問的，思想的刺激を受け，問題意識を新にされる機会になるということ。これは，学生においても同様である。

(2)　第2に，群として共存し，ある教育上のプログラムや施設や行政当局の機能のある部分を共有する安定性の中でカリキュラム，多様なタイプのセミナー制の試みなどを含む教育方法，教授・学生の関係等における大胆な創造的，革新的実

験をなすことが出来るということ。このような柔軟性のある実験は，行政機構の組織がかたまった伝統的な大きい大学では不可能である。ことに今や大学観そのものが根本的に考え直されることが求められており，教授・学生・行政スタッフらの関係も大学共同体形成への彼らの参加の仕方も根本的に革新されようとしている。それはある安定の中での大胆な自己批判や伝統の検討と冒険的実験が必要である。

(3) 第3に，設備費，人件費などを含めて大学経営上，経済的合理化の利点を与えるということ，即ち，研究施設や行政・管理に必要な費用は，コンピューター時代，サイバネティックスの時代には莫大なものとなる。それらをある程度共有出来るという経済的利点と共に，教育行政の責任者も夫々の大学の教授陣より代表が廻り持ちで責任をとることによって固定し，官僚化した行政当局というものを生み出さない流動性，新鮮さが期待出来る上に，特定の学者を行政のために犠牲に供してしまうことを防ぎ，人的資源保護の面からの利点があること。

最近，アメリカの大学関係で広く読まれているらしいワレン・B・マーティンの本, Warren Bryon Martin "Alternation to Irrelevance——A Strategy for Reform in Higher Education" (1968) も適切さを失った今日の大学に代る新しいモデルとしてクラスター型大学をあげている。

尚，私が「クラスター型」の ICU への適用の可能性を考える場合，それは，第一に，教養学部の内部構造に，即ち，学科間の在り方の中にクラスター型の考え方をとり入れること，即ち，5つの学科のうち，ある特定の学科が，その学問分野独自の要請に応えるために必要とあれば，従来の ICU 教養学部の伝統的バランスを乱したり，教養学部のワク組の制約下の専門分野という従来のワクを超えるように見えても，必要な発展を研究・教育の質において許容しつつ，しかもそれを尚ひろく包擁する教養学部大学としての特質を前進的に生み出してゆくというような可能性は考えられないか——ということを意味している。あるいは，教養学部を形式的には発展的に解体し，新しい幾つかのユニットによるぶどうの房を創設しつつ，Liberal Education の教育理念を内実において生かしてゆくという道があるかもしれない。

第2に，クラスター型の ICU へのもう一つの適用の可能性として考えられることは，外的連関におけるクラスター型の構造を考えることを意味する。即ち，現在，ICU のキャンパスに隣接して，東京神学大学，ルーテル神学校などが既に存在する外，将来，ICU の周辺に他の教育機関，研究機関が設立される可能性がある。その中には，アジアの地域研究，ないし，諸地域の比較研究の研究センターなどをという希いの実現も期待出来るかもしれないし，ICU のキャンパスの一部にアジア諸地域の医者を養成する医科大学の設立を提案する機関もある。

（未定）また，距離を少しひろげて，地理的に余り遠くない，そして，教育理念に共通性のある大学，その他をも含めて考えることも出来るが，いずれにせよ，ICU と他の諸教育機関との間にクラスター型の協力関係をうちたててゆくという可能性も考えうると思う。

これらは未来への発展的方向なり，可能性についての一つの考え方であって，他にも，いろいろと可能性は画けると思う。多様性と総合性，専門分野とリベラル・エデュケーション，独立性と共存性等のダイナミックな，そして革新的な大学の在り方を探求する時，クラスター型大学のイメージは他国のそれの形式的真似事としてではなく，豊かなイマジネーションをもって私共の大学形成の考え方にとり入れることが出来るように思えるのである。

B　カリキュラムのあり方（講義形式とセミナー形式）

第2には，大学教育は講義中心のカリキュラムでよいかという問題があります。今日，私共がひとしく痛感することは，(1)烈しく変化しつつある歴史の現実にあって，未来は全く未決定の問いの中にあり，特定のタイプの教育や知識がそのまま将来役立つかどうかわからないということ，(2)専門がますます分化し，知識が急激に増加・増大しつつある今日，何を学ぶか（What to learn）だけではなくて，如何に学ぶかを学ぶこと（Learn how to learn）が最も必要な課題ではないかということ，(3)人間の相互関係にしても，教師と学生との関係だけではなくて，価値観，人間関係が大きく変化しつつあり，社会構造全体とのかかわりの中で人間関係の whole pattern が問われているということ，(4)信頼ということも個人的信頼ということだけでは確保し難く，今日の変化の質を問い，その方向づけを探求する姿勢，在り方における相互信頼が大切な課題であること等々の問題です。こうした現実にあって共に大学を形成し，学問的探求を共にし，歴史の形成への積極的参加を追求しようとする学生と教授とが，従来の静的な，しかも，一方交通的性格の強い講義を中心とする教育形式でつながっていてよいのかという問が起ってきます。勿論，専門分野によってこうしたことも一律には云えませんが，講義形式は出来るだけ特定のものに限定し，大部分の教科をセミナータイプにきりかえ，学生と教授とが共

に学び，考えることを通しての学問的訓練に重点をおいてゆくことが望ましいのではないでしょうか？　イギリスのサセックス大学などでは，講義は教授はしても，しなくても自由であり，学生にとっても〔註〕，出席してもしなくても自由とし，tutorial system とセミナーによる学問的訓練（期末には総合的学力試験がある）に重点をおいています。

ICU におきましても，既にその方向に強調点をおきつつあり，社会科学科では Advanced Studies in Social Science として，諸々の専門的トピックのセミナーが持てる制度が活発に行われつつありますし，人文科学科では専攻領域のセミナーの外に Inter-departmental seminar も考慮されつつあります。こうした実験的段階を更に前進させて読書，リポート，共同研究，討議等を総合したセミナー形式を中心とした教育方法へと思い切って移行するというような可能性も考えることが出来ます。（決定ではありません。）しかし，こうした教育方針を真に意義あるものとするためには，教授の間に活発な研究活動が推進される必要があり，そのための時間的，経済的条件を大学は責任をもって備える心構えがなくてはならないと思います。こうした方向への結論はまだ出ていません。学生諸君はこうした方針についてどう考えられますか？　このことについての意見や他の提案がありましたら，積極的によせて下さい。

〔註〕 サセックス大学

イギリス政府が創設した新しい大学群の一つとして1961年に正式に認可されたサセックス大学（the University of Sussex）は，1959年頃からアカデミック・プランニング・コミティが任命されて，周到な考慮をもって計画されて来たのであるが，オックスフォード大学やケンブリッヂ大学のような古い伝統を持つ大学では改革が不可能だとのことで，学部制の拘束から大学を解き放ち，流動性を最大限に確保し，inter-disciplinary な学問方法に大担，かつ，多様な新しい試みを行っている。次の半世紀の変化は過去半世紀の変化よりも遙かに急激な様相をもつことが予測されるが，そうした変化に対して充分に創造性と有効性とをもって知的貢献の出来るような頭脳の柔軟さ（flexibility of mind）を教育の重要な課題として創設者たちはこの新しい大学の構想，教科内容と教育方法等を立案して来たようである。「新しい大学」としてのサセックス大学の構想と試みを調べる

ために私が1968年夏サセックス大学を訪ねた時，幾つかの教授グループと語りあう非常に興味深い会合を大学当局が用意して待っていて下さったが，行政当局者，あるいは，いろいろの分野の教授たちからこの大学の設立の夢とその構想，inter-disciplinary なアカデミック・プログラムの立て方，セミナーの内容と方法（たとえば，社会科学者と哲学者との協力による「社会科学の概念と方法論」に関するセミナーのくわしいプラン，経済学者，心理学者，社会学者らの協力による「経済成長」の問題への取組み方，あるいは，今日，学界において指導的な立場にある生物学者たちの助言と提案に基いて，近来，非常に厳密に分化して来ている生物学の新しい unity における integrity を追求しようとする試み等，一学対一で学生が教授から学問的訓練を受ける tutorial system，学生代表の大行政（財政問題を含む），アカデミック・プログラム等の委員会への参加の仕方等々についてくわしく話をきいたが，非常に興味深く，学ぶところ多かった。

尚，参考書に David Daiches 編 "The Idea of a new university——An Experiment in Sussex"（1964）がある。

C　アカデミック・プログラムへの学生参加

第3は，アカデミック・プログラムは誰がどう決定するかという問題です。今日，大学の諸問題の決定に大学共同体構成員のうちの誰がどのように参加するかということは，大きな関心事となって来ています。そしてこの問題は，大学が大学としての目的を最も建設的に果してゆけるように，そして大学構成員の納得がゆくように考えあい，その方向づけと，具体案が生み出されてゆかねばならないと思います。先ずアカデミック・プログラムについて考えてみますと，これは伝統的に教授会の責任事項であり，教授会を代表して教養学部長と各学科長とによって構成されている学科課程委員会（The Curriculum and Instruction Committee）が立案し，教授会の承認を受けて実施して来ました。私共はこの学科課程委員会（学科長会議を兼ねる）のアカデミック・プログラムの立案と実行に学生諸君の参加を求めたいと考えています。その現段階における具体案は次のようなものです。

(1)　学科課程委員会は学期に1，2回，すべての学生の出席を歓迎して公聴会を開き，学生諸君の意見を求める。（これは既に実行中）

(2) 各学科内において専攻別に，教授，助手，学生の懇談会を持ち，その討議を通して希望や意見をまとめ，それを学科教授会，更に学科課程委員会に反映させることも考えられています。

(3) アカデミック・プログラムについて，学科長の学科別報告，あるいは，教養学部長の全学的総合的報告などを印刷して学生にしらせ，意見を徴すると共に，必要と認めた時には，コンヴォケーションなどにおいて取上げる。

(4) 学生の個人として，あるいは，グループとしての意見や希望を歓迎する。

教授達の自発性による自らのクラスについての学生の反応・評価を求めることなども，段々と実行されてゆくことと思います。

以上は現段階での試みの一例にすぎません。尚，これは，アカデミック・プログラムの領域をこえて一般的諸問題のことになりますが，ついでにふれておきますと，大学の諸問題の決定に学生諸君の意見をどう反映させてゆくかということは，諸々の委員会，たとえば，学生寮はいうまでもなく，その他，体育施設建設委員会，図書館増設委員会，あるいは，宗教委員会（既に SCA の代表がしばしば参加している），図書委員会などにおいても，夫々にいろいろの方法で学生諸君の意見が求められてゆくことと思います。そうした具体的体験をつみかさねることを通して，ICU における諸問題決定への学生の参加（学生の意見の反映）の原則が，現在この問題を研究，検討しておられる学生部長よりの提案，学生諸君と教授会メンバーとの共働と協力等によってうちたてられてゆくことになると信じます。大学観そのものの再検討が要請されている今日，こうした学生参加の原則も，より根本的には，大学の構成員たちが新しい大学観を共に追求し，共に確認してゆく過程の中で明らかに生みだされてゆくのではないかと思います。学長選出の問題につきましても，従来理事会の決定事項であったこの問題（従来，教授会代表の選考委員が理事会を代表する同数の選考委員と共に協議した。過去の経験においては理事会は教授会の意志を尊重し

て来た。）に教授会が原則としてどのようなかかわり方をするかを考える特別委員会が教授会により選出され，現在検討中です。学生，一般職員等のかかわり方などもやがて討議されることと思います。大学共同体の未来像について，また，日常の諸問題の決定に大学構成員がいかにかかわるかの問題を検討する研究委員会か協議会が構成されるのも一案かと思います。こうした大学諸問題の決定に対する大学構成員の責任ある参加の問題について積極的意見や具体案があったらきかせて下さい。

D　各学科の今後の強調点と課題

尚，教養学部の5つの学科は今後大体次のような強調点をおいて充実してゆく予定です。

1.　社会科学科

(1)政治学においては今後国際法，及び，国際関係に重点をおき，この分野に多彩な教授陣を迎え，充実されてゆく予定。中ソ関係の専門家レオン講師を迎えた外，日朝関係に趙淳昇教授，国連のウ・タント事務総長政治局員の明石康氏をはじめ，下記のインド，パキスタン，フィリピン，韓国，アメリカ等の学者たちをも迎える予定。

(2)経済学においては，近代経済学とマルクス経済学の両要素のインパクト，ないし結合を目ざし，つうした観点からプログラムの充実がはかられつつあります。労働問題の専任教授も迎えたい希望です。

(3)歴史専攻のプログラムを新設し，大塚久雄教授の歴史学概論による方法論の研究，日本，中国，Korea，インド，ヨーロッパ等の思想史的アプローチによる講座をも含めて歴史のプログラムの充実をはかっています。

(4)社会学，人類学の分野に新しい教授陣を迎えて積極的強化をはかろうとしています。

尚，後述のような国際研究センター（アジア文化比較研究プログラムを含む）の設置が社会科学科，行政大学院との関連において準備され

つつあります。

2. 人文科学科

文学，美術（音楽），哲学・倫理学，宗教の夫々の専攻プログラムの充実がはかられていますが，アメリカ文学にカール・サンバーグの研究者であるダーネル夫人を迎える予定であり，日本文学にも専任講師を迎える予定です。哲学プログラムの強化のために川田殖助教授を迎え，古典文学には専任講師の補充を期待しています。フランス哲学に森有正教授を1969年9月より迎えることになったことは重要な意味がありますし，宗教哲哲の分野に現在ヨーロッパの学界に重きをなすブリ教授を迎えている外，1969年4月よりはプリンストン大学宗教学部長であったジョーヂ・トマス教授を迎える予定です。

文化の根底にある問題と福音との関わりを，人文科学的視野より研究することを目指しているキリスト教と文化研究所の活動と相まって人文科学科の研究と教育のプログラムが強化されてゆくと共に，やがて，人文科学科大学院の設立へと発展してゆくことが期待されます。

3. 自然科学科（1969年4月より理学科と改称の予定）

数学，物理学，化学，生物学の教室を専攻プログラムとして内包していますが，専攻教室を増加するよりも，現在の限定された教室の充実，強化を夫々の分野における人員の増加，研究設備，及び，研究費の増強等に力を入れると共に，大学院の設置を推進する方針です。このような方向への充実を通して，教授・学生共に今日の自然科学科の分野の急速な進歩，発展の現実に対応しうる研究条件，および，カリキュラムの強化をはかることが強く望まれています。

こうした方針を実行してゆくためには，現在の数学，物理学，化学，生物学の4つの柱のうち，順を追って強化をはかるということが必要となることも考えられますが，また他方，ICU の教育方針は自然科学科における専攻分野間の有機的連帯性を強調し，境界領域を広げつつある近代科学の要請に適応し，ユニークな貢献の出来る学生を養うことによる独自な特

色の発揮が目指されています。

4.　語　学　科

(1)言語学の充実に学生の強い要請があり，この目的達成のために，数年のうちに言語学の大学院の設置が希望されています。

(2)コミュニケーションを専攻する学生数が増加しつつあり，この面の強化が長年の課題です。今年度は新しく来られたバーンランド教授の新鮮なアプローチが多くの学生たちに深い感銘を与えています。

(3)語学科は ICU の全学生の英語教育に重要な役割をになっていますが，これは英語が世界に広く通用する国際語の一つであるという意味においてであり，他方，日本にある大学として ICU のすべての構成員が日本語によってコミュニケイト出来る能力を備えることが期待されます。ICU の bi-lingual な特質を真に生きたものとするための語学科の貢献は重要です。

(4)フランス語，及び，ドイツ語の充実が計画されていると共に，ロシア語が英語につぐ重要性をもってきている現在，ロシア語講座の新設が考えられています。

(5)既設の中国語の講座を更に充実の予定。これはアジアの地域研究にも資するところ大だと思います。

5.　教育学科

(1)教育学と(2)心理学，及び，コミュニケーション科学を2本の柱として専攻課程を持っていますが，これは教育大学院の基盤としても重要です。教育学科のプログラムは創設以来，教育研究所の主題と密接に関連して進められて来ました。研究所創設（1953年）以来の研究主題は，(1)民主主義の教育哲学，(2)アジアにおけるキリスト教々育の原理，(3)国際理解の教育，(4)教育科学の基礎としての教育心理学，及び，教育社会学，(5)視聴覚教育，(6)大学学生補導問題，(7)中等学校における理科教育の方法，等です。

こうした背景のわくに，

○ 国際理解のためのコミュニケーション研究

○ 学習指導過程の研究

○ 高等教育のカリキュラム改善の研究

○ 大学学生問題

等の研究プログラムを専攻プログラムと共に逐次充実してゆく予定です。

II. ICU の国際的使命達成の課題

今日，世界人類にとっての切実な課題は，民族，宗教，文化，社会体制等の相違の故の対立，相剋の現実を超えて，異った価値を否定しあうのではなくて，理解しあい，平和的に共存することの出来る新しい世界への道だと思います。ICU は第二次世界大戦の荒廃のあと，新しい日本の形成に積極的に貢献出来る青年であると共に，民族や国家の対立をこえて，人類がひとしく尊びあえるような平和と正義の支配する新しい世界を形成するために働けるような青年を育成しようという使命観をもって創立されました。この大学の教育は対立する諸民族・諸国家・社会体制等が全く新しい関係に立ってゆくような世界像の実現に深い関心をもち，キリストのとりなしの愛の精神に基いて，対立的勢力を和解に導き，両者が人間の自由，あるいは，社会正義について夫々に積極的な問題提起をしているならば，それらを総合して更に新しい世界形成の原理を生み出してゆけるような人間を育成する使命をおびていると信じます。

ことにアジアにある大学としての ICU は過去において帝国主義的圧力をもってわが国が加害者の立場で苦しめたアジアの隣邦諸国，独立後年月も浅く，発展途上に幾多の困難な問題をかかえているアジア諸国の人々の問題に深い関心と責任感と改悛の思いとをもってその重荷を共に負う責任があると思います。こうした ICU の国際的使命を達成してゆくためには，勿論，日本にある大学として，日本人学生は自国の伝統に根を深く持ち，その思想・文化の価値を堅持すると共に，その内包する問題にも冷静に深

く洞察する真の日本人であることを背景としての真の国際人であることが求められていることはいうまでもありません。こうした国民的課題とそれをこえた国際人たる課題とのかかわりは，ICU に学ぶいずれの国籍，あるいは文化圏に属する学生においても同様であると思います。

ところで，ICU の国際的使命を達成してゆくためのもっと充実したカリキュラム，また国籍を異にする学生たちの交りの持ち方，寮生活等，根本的検討が必要であり，現在，教養学部長室において，外人学生の実態をも含めて，こうした問題を調査，検討中です。

このような現状分析に基いて，今後，国際教育，そのための教科課程等が新しい段階へと方向づけられてゆかねばならないと思います。ここには，近い将来に具体化が可能と考えられる 2,3 の点についてのべたいと思います。

A　アジア諸地域の大学との交流

国際基督教大学といいながらも，今までの ICU の体質は多分に日米的（bi-national な）色彩が濃厚でした。それはこの大学が日米両国のキリスト者達の祈りに基いて発足したことを考えます時，自然のなりゆきであったと考えられますし，この特質のよい面は今後も重要な要素として保持されてゆくことと思います。しかし，この大学の真の国際的使命を達成するためには真の意味で国際的大学となることが主要な課題であり，ことに，アジア諸国との密接なつながりを現実化してゆきたいと思います。

ICU の教育における国際的意味を強調し，充実してゆくためには，まず，日本を勿論含めてアジアの歴史，その伝統的文化・思想の内包する価値と問題，あるいは，長い植民地支配が残した困難な重荷，アジアの近代化の課題とそれをはばむ内的，外的障害等に関する深い理解を養うことが重要な課題だと思います。このような教育目的を達成してゆくために次のような諸点に強調をおいてゆきたいと考えています。

(1)　アジアの理解に資するような講座（中国語，朝鮮語など，語学の講座

をも含めて）をより多く設置すること，および，アジア諸国の大学よりの教授をより多く招くこと。

1969—70年頃に ICU に招く予定のアジアの学者の中に次のような著名なすぐれた学者たちがあります。

チャンドラン・デヴァナサン博士	インド政治思想史	インド
アンワ・バーカト博士	政治学（インド・パキスタン関係およびアラブ・イスラエル関係）	パキスタン
エスピリト博士	経済学	フィリッピン
趙淳昇博士	国際関係論	韓国
李基白教授	朝鮮史	韓国

(2) アジア各国の諸大学よりアジア人として日本で学ぶことに積極的な問題意識をもったすぐれた学生たちをより多く ICU に留学生として迎えたいと考えています。各国の諸大学，および，文部当局，日本大使館等にも協力を求めるよう連絡をつけつつあります。現在 ICU におけるアジア諸国の学生は65名であって，全学生の4.7パーセント，外人学生の中の32.5パーセントにすぎません。アジア人学生の比率を増すことを考えています。

(3) ICU とアジアの諸大学との間に学生，若い研究者，教授らの3段階の交換プログラムを計画しています。

(a) 学生の「アジア訪問ティーム」—異質文化よりのショックを体験するために—

私ども日本人は自らが認識するよりも遙かにアジアの現実に関して無知です。アジア隣邦諸国民の問題への関心と正しい理解を養うための教育活動の一つとして，また，将来，専門的研究を進め，あるいは，特殊技術を身につけることによってアジア諸国民と協力し，また彼らのために貢献しうる道を学ぶ等の意味をも含めて，夏休みの数週間，インドネシア，マレーシア，中国，あるいは，南北ヴェトナム等を訪問する学生の「アジア訪問ティーム」を組織し，（教授1人か2人が同行）送り出し

たいと思います。彼の地の大学の協力を得て，その学生寮に泊り，彼の地の学生・教授と共にセミナーを持ち，また文化的，社会的諸問題を学ぶための旅行を行う。出来れば，それを韓国の延世大学との場合のように，隔年互に訪問しあうような交換プログラムに発展させてゆきたいと考えています。

ICU においてこうした訪問にそなえて学生諸君の間にアジア研究セミナーが発足しており，その仲間の中からティームに参加する学生を選びたいという希望も表明されていますが，より多くの学生諸君のこうした準備活動への参加をおすすめしたいと思います。

ICU 同窓会（会長　横堀洋一氏）では，こうしたプランに深い関心を示して下さり，同窓会主催の音楽会の収益の一部を献金することを検討していて下さるとのことです。他にもこうした計画のための資金を集めたいと考えていますが，学生諸君もアルバイトなどで，出来るだけ自分たちの力によっても資金の一部を用意したいという考えもあるようです。この「アジア訪問ティーム」に関心のある人たちは教養学部長に申し出て下さい。学生諸君の協力を期待しています。

ただ，ここでことわっておきたいことは，こうした他のアジア諸地域の現実をしることが，表面的な旅行者的関心での訪問に終ってはならないのであって，異質の文化を知ることは，私ども自身が身をおく国の足もとの問題，その特質と矛盾をより深く，より構造的に掘り下げて理解しようとする鋭い関心へとひるがえって来るべきだと思います。そしてこれは，いずれの国人，いずれの文化圏との交渉においても同様だと思います。

(b)　若手研究者（大学院生を含む）の交換

アジアの地域研究，その他の専門的アジア研究を目ざす若手研究者（大学院生を含む）の交換をアジアの諸大学との間に行いたいと思います。こうした若い専門家は訪問先の大学で教育プログラムや研究プロジェクトに参加することも出来ます。

(c) 教授の交換，および，共同研究

アジアの諸大学との間に特にアジアの地域研究に資するような専門分野の教授の交換を推進し，互に夫々の国の文化，社会の根底にあるものをより深く学びあう機会とすると共に，互にアカデミック・プログラムの充実に貢献しあうことにもつとめたいと思います。

フィリッピンのアテネオ大学に久武学長がかってゆかれ，そのあと現在，都留春夫教授が行っておられ，来年度は社会科学科の佐藤信行助教授が出かけられることになっていますが，このプログラムもこうした趣旨のもとにおける大切な一つの活動と云えます。

更に，また ICU はアジアの近代化の地域研究，あるいは，比較研究，即ち，アジアの諸国の経済発展，政治組織と政治運動，ないしは近代化と伝統的価値体系等の諸問題に関する共同研究のプロジェクトを立て，アジアの他の諸大学の参加を求めると共に，カンファレンスを開き，アプローチや方法論の検討，夫々の地域における研究成果の報告等をも計画したいとねがっています。ICU がアジアのいずれかの地域に ICU のアジア研究センターをおくことも考えられます。こうした研究活動は ICU におけるアジア研究の学問的水準を高め，充実することに資するところ大だと信じます。

以上のような交換プログラムを推進するために私どもの計画案をアジアの諸大学に送り，協力を求めるよびかけをしています。私どもは，ICUをアジア諸国の学徒にとっても，西欧諸国の学徒にとっても，アジアの問題を研究するために欠くことの出来ない意味をもつような大学にしてゆきたいとねがっています。

ここで特にふれておきたいことは，日本は中国と他の世界との間のよき仲介者，媒介者である責任を痛感することであり，ICU がそのために，どのような働きが出来るかということです。出来るだけ早い機会に学生の「アジア訪問ティーム」を中国に送りたいと希いますし，可能になり次第学者の交換なども実現したい希望をもっています。そのためにも中国語の

習得は必要です。

B　アメリカとの関係の革新

ICU の日本人学生はよく，「何故 ICU はアメリカの旅行者の根じろに大学を呈供しなければならないのか？」と云います。これは大部分のアメリカ人学生は真面目なよい学生なのですが，中に旅行者的軽い関心で ICU に籍をおいている場合があり，そういう学生は日本語も真剣に学ぼうとしない。従って日本人学生にとっての重要な関心である諸問題についての真面目な話しあいに加わることもせず，日本人教授のクラスに出て学ぼうとする積極性も熱心さもないという批判です。ICU をアメリカの連続と考え，アメリカの大学と同じ英語の講義，英語の生活を期待し，日本語を使い，日本語で学ぶことの重要性を考えずに来ているアメリカ人があることも事実です。これは ICU の bi-lingual（2カ国語使用の必要）の意味が正しく理解されていないことに帰因することかもしれません。しかしながらこの問題は，他方，「日本人学生の中には，出来るだけ英語で講義の行われる外人教授のコースはとらないようにし，出来るだけ英語をつかわないで ICU を出ようとする人たちがあり，外人学生とも真面目に交わろうとしない」という批判の声と相表裏する問題かもしれません。この点は充分に反省し，検討と努力とを重ねなければならないと思います。

また，アメリカ人学生の入学については，現在，入試委員会が慎重な検討を加えつつあります。他方，ICU からアメリカに留学する学生の場合にも，すぐれた成果も見られる一方，いろいろ問題もあり，批判や忠告もアメリカの大学からよせられています。

こうした現実を背景として，日米の交流，相互理解を本当の意味で建設的なものとするために明確な問題意識に立って，互の文化・社会の本質的問題にふれ，その根底にある価値観や社会矛盾を真面目に深く学びとろうとする精神にささえられた計画が必要だと思います。そして，これは，日米関係に限らず，世界のどの国，どの文化圏との交流プログラムにおいて

も共通の課題だと思います。

こうした課題を積極的に受けとめ，ICU の教育における国際的使命を革新的，前進的に果してゆくために，一つの実験的試みとして次のような交換プログラムを立てています。

カリフォルニア大学との学生・教授の交換計画

(1) 現在 ICU とカリフォルニア大学との間の契約は，カリフォルニア大学より ICU へ一群の学生を送るための一方的契約でしたが，これを両大学間の互恵的交換計画に改めることになりました。ICU よりは10名の学生を選び，1人の教授付添いにて出来れば1969年9月よりカリフォルニア大学に送りたいと考えています。最初の1学期はサンタ・バーバラのキャンパスで共に学び，第2学期よりは希望のキャンパスに移ることが出来，1年留学後 ICU に戻る予定です。

(2) ICU の教授はカリフォルニア大学で教えると共に，ICU ティームのアメリカの文化，社会の現実への適応，および勉学生活に助言と指導の責任をとることになります。

(3) ICU，および，カリフォルニア両大学は，この交換プログラムを可能にするために，学生に対する経済的援助（スカラシップあるいはローンなど）の原案を作成し，大体の了解に達しています。デルマ・ブラウン教授の御尽力もあって，カリフォルニア大学ではこのプログラムの日本人学生のための特別のスカラシップも考えて下さっています。

(4) この交換計画によって留学した学生はICU，および，カリフォルニア大学夫々において，今後他方へ送り出す学生への助言，あるいは，他方より送られて来るティームのオリエンテーション，特に留学した国の文化，社会の根本問題を正しく理解し，人々と真の意味での“対話”の持てる生活に入れるよう，そして，留学目的が健全に達成できるよう助ける責任があることとします。すなわち，夫々の大学における国際教育に重要な貢献が期待されます。（関心のある方は教養学部長に申し出て下

さい。資格・条件その他につき詳細なプリントが用意されるはずです。）

ICU とカリフォルニア大学との間のこの交換プログラムは，ICU における国際教育の新しい段階を画するものであり，この実験が有効に成果をおさめるならば，このタイプを他のアメリカの大学との場合にも，また，更に，他の国々との交流プログラムにも適用してゆきたいと考えています。

C　その他の地域との交流の問題

(1)　ヨーロッパ諸国（東ヨーロッパの社会主義諸国をも含む）から学者，および，学生をより多く迎えること，ヨーロッパのある大学との交換計画なども考えています。

現在スイスよりローエンバーガー教授，ブリ教授，イギリスよりマシューズ教授らを迎えていますし，パリ在住の森有正教授を招くことになったことなどもこうした意味の強調を示すものです。

(2)　アフリカ，ラテン・アメリカなども段々に重点をおいてゆくべきでしょう。

しかし，より緊急の問題としては，ICU における日本人学生と外人学生との交りを真の意味での生き方“対話”とすることが出来るために，どのような配慮が必要であるかを考え，実行に移すことだと思います。

D　国際研究センター設置の可能性

ICU における国際関係，国際政治や経済，国際組織などの諸問題の研究，あるいは，アジアの近代化と伝統的価値意識，社会組織等の比較研究，等々を課題とした国際研究センターが社会科学科および，行政大学院に関連して設置される予定です。キリスト教，あるいは，西洋思想，その他，異質文化との出逢いを通して，アジアの伝統的価値体系，および，社会構造がどう変化して来たかを主たる研究テーマとして来たアジア文化研究委員会の今後の活動も，これに合流する可能性があります。

国際連合のウ・タント事務総長の政治局員の明石康氏が，1969年4月に

は休暇をとり，ICU 講師として来任されると共にこの研究センターに参加し，その発足と充実に協力して下さることになっています。他にも協力者を迎えたく計画中です。

なお，これはすべての学問分野にわたって云えることですが，ICU が外国の学者と ICU の教授たちとの共同研究の活発に行われる場となり，そうした学問的雰囲気が学生を深く刺激する場となることが望まれます。

III. ICU のキリスト教的使命達成の課題

アカデミック・コミュニティとしての ICU がキリスト教を基礎として立つということはどういうことなのでしょうか？　それは偏狭な，キリスト者のみのゲットー的大学を意味することではなくて，むしろ，神以外の何ものをも神（絶対的価値）とせず，従って，自らの立場をも含めて，あらゆる立場を相対的立場において批判することが出来，どのような理論をも考え方をも自由に，かつ，冷静に研究対象とすることの出来る本当の意味で自由な大学であることを意味するのではないでしょうか？　唯一の神のみを神とするが故にすべてのものを冷厳に対象化出来ることこそ，科学的精神の基盤でありますし，それは学問的方法や理論の科学性をゆがめたり，限定づけたりするものでは決してないと信じます。また，キリスト教の真理に立つということは，すべての人間が真に人格としての人間であることの基礎を明らかにすることであり，キリスト者か非キリスト者かの別をこえて普遍的，人類的意味をもつと信じます。

しかし，現実にはいろいろの疑問がなくはありません。ICU が専任教授をキリスト者に限定しているのは，是非招き度いと思うすぐれた学者を時として招くことが出来ず，その結果，ICU の学問的質を低下させる原因となりはしないかという質問をよく受けます。また，兼任の場合，或は，例外のケースは別として，原則として，専任にはキリストの真理にコミットする人に限定していることは異質の思想のチャレンヂを受けて立つことの出来ない，純粋培養的ひよわさを学問的にも，思想的にも，また，キリ

スト教信仰においてさえも，もち来らせているのではないかという問いかけもあり，私共自身も常にそうした自問をしています。この点，アカデミック・コミュニティとしての ICU は本当の意味で「開かれた大学」でなければならないと思いますし，ICU の教育理念と目的に賛同しこの大学の形成に真実にコミットして下さる限り，出来るだけ広く，すぐれた学者たちを迎えたいというのが私共のねがいです。その方向にだんだんに積極的な道づけがなされてゆくと信じます。また，そうすべきだと思います。

ただ，ここで私共が真剣に考えなくてはならないと思いますことは，次のような諸点です。

(1) 今日，諸々の大学が，イデオロギーの対立，その他の理由によって分裂し，相剋の場と化している時，人類の未来への課題を負う大学としてそのインテグリティの基盤を「キリスト教の真理」におく大学の存在は，一つの実験でありうるのではないかということ。

(2) 私共の大学が伝統や習慣に依存して存在している大学ではなく，新しい理想をかかげて冒険的に実験を試みる大学である以上，そして，その目的達成のために，常に自已革新を行いつつ前進してゆく大学共同体でありたいとねがう時，大学の中心的構成員が，自己の立場を絶対化することなく，真理の前に共に謙虚にひざまづき，「祈りを共にしつつ，共にたたかう群」であることは大切なのではないかということ。

(3) 大学共同体は真理探求の学問共同体であり，社会と世界の矛盾に眼を開き，その在り方を模索する社会的人間の集合体である。この大学共同体をして，新しい社会と世界の形成の原理を共に問いつつその革新へと積極的に参加する責任ある人間を育成しようとする人格共同体であらしめたいとねがう時，教授と学生とが人間としての信頼と尊敬とをもって，共に真理の前にひざまづき，共に学び，互に学びあうことの出来る人間関係の基礎が確乎として保持されていなければならないということ。

((2)，(3) に述べたことは理想形態であって，現実の状況には多くのゆがみがあることは事実ですし，また，これがキリスト者の一般的見

解だということも出来ないかもしれません。)

(4) ICU は，創立以来，16 年を経たばかりの若い大学であるだけに，その創設の理想，教育目的は構成員の一人一人の精神においても，また，日本の現実，あるいは，世界の現実においても未だ充分に根をおろしたとは云えない。それだけに，ICU の教育理念とその課題は充分に深め，とぎすまし，歴史の展開の中で常に新な深みで自己革新的姿勢で受けとめ，全 ICU 人の共通の理解となるよう互に問いあい，がっちりとした基礎をかためねばならない。それには時間がかかるということ。

しかしながら，こうした考え方についても，全く新しい観点から Challenge することも出来るでしょう。真実な意味において真理を探求することの出来る学問共同体であるためには，脱皮すべきものは大担に脱皮し，勇気ある自己革新が必要だと思います。しかし，それには，提案される変革の目標とその意味と変革の方法，道づけが周到に考察され，提示され，大学構成員の間に論議され，納得されるものでなければならないと思います。

このような問題を学生諸君はどう考えられるでしょうか？

教授会におきましても，充分に考えあってゆかねばならない問題だと思います。

む す び

以上，「アカデミック・プログラム」についての基本的な考え方，その具体化の方向，および，直面している問題などをあるがままにお伝えしました。以上は結論でも公約でもありません。私共が“新しい大学像”を求め，学問共同体としての ICU の体質や構造を革新しようと考え，方針を立て，具体化してゆこうとするプロセスにおいて，そのなまの問題をあるがままに学生諸君にお伝えし，皆さんの批判や意見を得つつ，教授会メンバーと学生とが共に考えあってつくり上げてゆく「われわれのアカデミッ

ク・プログラム」にしてゆき度いと希う次第です。

この手紙をよまれた上で，個人としてでも，あるいは，グループとしてでも，いろいろ御意見をよせて下さい。学生諸君よりの意見や提案を得ることによって，ICU のアカデミック・プログラムが生々と充実したものになってゆくことを期待しています。

（この手紙は，長清子教養学部長が執筆し，各学科長，学生部長，宗教委員長，数名の若手教授，助手の方々に目を通していただき，その御意見や助言を受けた後，多少の加筆をなしたものである。尚，この度，少々加筆した。）

〔附〕

上記，教養学部長よりの手紙に対して学生諸君からいろいろの声がよせられた。それをすべてここに収録出来ないのは残念であるが，それらの意志表示のうち，社会科学科の4年生，大学院生らのグループからよせられたアカデミック・プログラムの改革案を学生の意見の一例としてここに収録したいと思う。

社会科学科カリキュラム改定に関する一試案

社会科学科学生グループ

この試案の前提となるものは，理念的には ICU が学問共同体であるという観点から学生も又教官同様学問研究の主体であるとし，制度的には現行の教養学部制を維持することを現在の学生数約1,200名を堅持することである。

問題の対象を社会科学科に限定する。

Ⅰ．先ず　①「社会科学」の位置づけ

②社会科学科の専門コース

の二つを問題とする。

① 社会科学科の位置づけ

以下の三点から社会科学の基礎概念に対する認識を深めることが必要である。

(1) 経済学科，政治学科というように科が社会諸科学に分類されておらず社会科学科であるからには，その目的において社会諸科学の総合性が重視されるべきである。(1)

(2) 注各専門コースに移行する基礎，前段階

(3) 各専門に於て，社会科学の方法論に対する十分な認識が不可欠である。これらの点に関する改善が現在強く望まれている。

具体的な改善案として次の点が考えられる。

A 社会科学専攻の学生に対して，1，2年次に於て（1年第3学期～2年第2学期），社会科学の基礎概念を学ぶ為のゼミ形式のクラスを設ける。ＳＳで一般教育のうち単位をこれにあてる。(2)

方法

イ 内　　容：社会科学の古典及び方法論に関する読書会形式のゼミ，終了時に論文提出。

ロ 単　　位：通年9単位（1，2年次に於て必修）

ハ クラス編成：10人前後のクラスで，1年間編成替えをしない。

ニ 指　　導：助手又は大学院博士過程クラスの学生

注1 この意味に於て，1968年度に改訂された社会科学専攻学生のための一般教育科目は本来の社会科学一般教育のあり方に逆行するものと考えられる。

注2 社会科学科以外の学生に対しては従来の一般教育を行う。又，社会科学科の学生に対する人文科学自然科学一般教育は現在の通りとする。

B 第4学年総合演習（SIS 単位）を現行通り最終学年に ffcr するが，その内容を上記の社会科学一般教育の目的に照し，改定案Aの継続として再び社会科学全体について考えるクラスとする。

C 基礎科目の内容を再検討する。

② 社会科学専門コース（3，4年次を中心として）社会科学科の各専門領域の広さに対して，現状は教官数が圧倒的に不足している為に，個々の学生の望む学問領域をカバーできない。又従来の体制のままで学生ののぞむ学問領域に応じようとすると，講義の内容および教官個人の研究内

容の質的低下を避け難い。

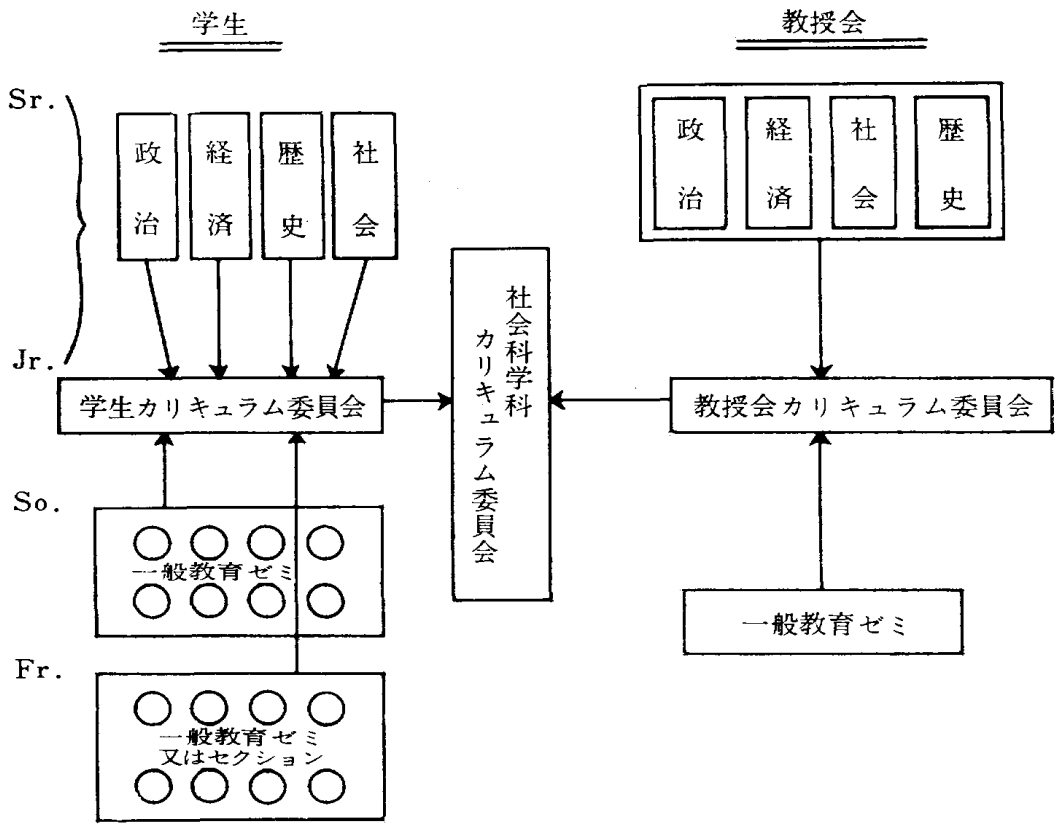
そのような現状を打開して，学問共同体の目的を達成するためには，以下の三点に対する認識が深められなければならないと思われる。

a．個々の教官の負担を軽減することによって，教官の研究時間を豊富にし，その研究を深めることによって，学生に知的刺激を与えること。

b．専攻を同じくする学生相互の協同を積極的に推進することによって研究の内容を充実する。

そのためには，社会科学を専攻する。3，4年生は「政治」「経済」「歴史」「社会」の四つの専門コースのうちの一つに必ず所属することとする。（この場合，各専門コースごとに専用の部屋を与えることが望ましい。）そして各所属コースの中で任意にゼミを構成する。そのゼミを研究及び教育の中核として積極的に認め，制度的に保障し，単位を与えるものとする。

図1



c．学生も又大学に於る研究の主体であるという前提から，大学の限られた人的，物的資源を有効に利用していくためには，教官同様その発言権が制度的に保障されなければならない。カリキュラムの編成に関しては特にそのことがいえる。

発言の母体として（次の２つの機関を考える。（図１を参照）

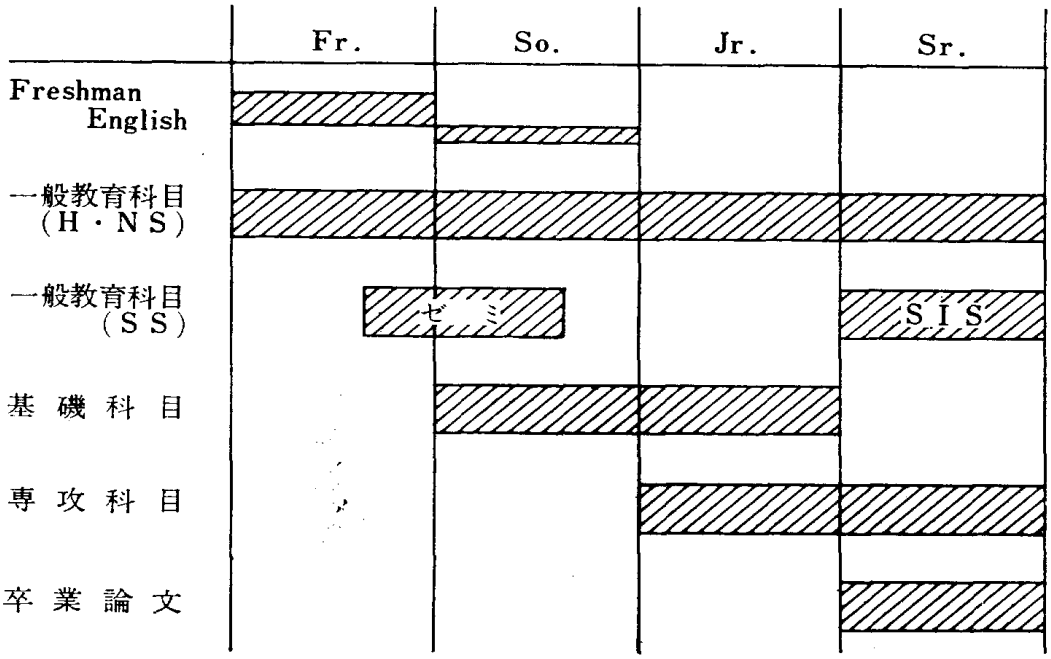
イ　３，４年次

上記②のＢの四つの専門コースの各々から代表を出し，各年度ごとに社会科学科学生カリキュラム委員会を組織する。この委員会では各専門コースから持ち出されたその年度のカリキュラムの問題点と次年度のカリキュラムの改革案を検討する。

教授会は，社会科学科学生カリキュラム委員会に対応するカリキュラム委員会を設置し，最終的に両者において調整し決定するものとする。これを社会科学科カリキュラム委員会と称する。

大学事務当局は，社会科学科カリキュラムの編成に必要な情報を与える責任を負う。

ロ　１，２年次



上記①のAの社会科学一般教育のためのゼミを母体に代表を選出し，社会科学科学生カリキュラム委員会に参加するものとする。

尚，一般教育ゼミが終了した1年次第3学期に於ては，従来のゼミ代表が継続して参加する。又，ゼミが開始される以前の1年次第1,2学期に於ては，現行の語学セクション代表が参加することとする。

その他

1．受講モデル

2．語学教育

専門過程に直接役立つような語学教育が考慮されなければならない。特に Freshman English の一部を専門と関連させて分散させるべきである。具体的には，例えば，一般教育ゼミの最後に提出する論文の英訳化を行い，2年次3学期に提出する。それをもって現行の Theme Writing に代える。それに従い，現在年次に行なわれる Writing のクラスを2年次1, 2学期に移行することなどが考えられよう。

(K. H., T. M. and Others)

In Search for a New Image of the University

—A Letter to the Students—

Kiyoko Cho

This is a letter to the students titled "Policies for the Academic Program" and sent as the Second Report to the Students from the Dean of College of Liberal Arts at ICU in November 1968. It was an invitation to the students to discuss the renovation of the university to search for a new image of the university and student participation in it. One of the various students' proposals for the renovation of the academic program which was prepared by a group of Social Science Division students is attached.

Preface

The Educational Goals of ICU and Its Tasks

I. Toward the Attainment of the Academic Commitments
   - A. Liberal Education and Specialized Education in the Liberal Arts College
     —Possibility of "Cluster" Pattern of Structure—
   - B. Curricula: Lecture Method and Seminar
   - C. Student Participation in Academic Program Planning
   - D. Future Divisional Emphases and Tasks

II. Toward the Attainment of the International Commitments
   - A. Exchange with Universities in Asia
   - B. Change in the Relationship with the United States
   - C. Exchange Possibilities with Other Areas
   - D. Possibility of Establishing a Center for International Studies

III. Toward the Attainment of the Christian Commitments